

なんじゃもんじゃ・宮の渡しコース 見どころ

① なんじゃもんじゃについて

正式名「ヒトツバタゴ(一葉たご)」、日本では本州中部の木曾川流域と長崎県の対馬に自生する、モクセイ科の雌雄異株の落葉高木。その由来には諸説あるが、「なんという名前の木かわからなかった」ので通称「なんじゃもんじゃ」となったというのが一般的。毎年4月末から5月初旬の7日から10日前後の短い間に白い花が咲き、その姿はまるで雪がかぶっているよう。

② 名古屋国際会議場(なごやくくさいかいぎじょう)

平成元年、市制100周年記念事業「世界デザイン博覧会」のテーマ館として使用され、翌2年に国際会議場としてオープン。設計として、施設が設置されている白鳥公園にちなみ、地上からは白鳥が水に浮いている姿、空中からは、白鳥が翼を広げている姿がイメージされている。3000名収容のセンチュリーホール等がある。会議場の中庭、玄関前にはレオナルド・ダ・ヴィンチの幻の作品である「スフォルツァ騎馬像」のレプリカが立っている。

③ 「熱田空襲」の被爆記念碑(あつたくうしゅうのひばくきねんひ)

太平洋戦争末期の昭和20年6月9日の熱田空襲の痕跡が残る堀川堤防の一部を永久保存する記念碑。空襲は当時軍需品を製造していた愛知時計電機などが標的とされ、43機のB29が飛来し、2,068人もの多くの命が失われ、付近住民や工場に動員されていた若い勤労学徒も多数犠牲となった。碑はその際、爆弾片で傷ついた工場すぐわきの堤防の一部を切り取って作られた。

④ 熱田荘(あつたそう)

木造・2階建・切妻造・さんがわらぶきひらい 棧瓦葺平入り・ひさしつき 正面庇付で、この建物は明治29年(1896年)武藤兼次郎が建てた「魚半」という料亭であった。太平洋戦争中は三菱重工業の社員寮として、現在は高齢者福祉施設として利用されている。市の有形文化財に指定されている。

⑤ 七里の渡し(しちりのわたし)

東海道のうち宮・桑名間は唯一の海上路で、七里の渡しの名称は移動距離が7里(27.5キロ)であったことに由来する。宮の渡し付近には当時、旅籠が約240軒あり、交通の一大拠点として、また尾張藩の海の玄関として栄えた。現在では「宮の渡し公園」として整備され、船の出入りの目印として寛永2年(1625)に建てられた「常夜燈」も「時の鐘楼」とともに復元されている。桑名側にも七里の渡しがある。

⑥ ほうろく地蔵(ほうろくじぞう)

「尾張名所図会(天保12年脱稿)」によれば、この石地蔵は、もと三河国重原村(現在知立市)にあったが、野原の中に倒れ、捨石のようになっていた。ところが、三河より焙烙(ほうろく)を売りに尾張へ来るものが、荷物の片方の重しとしてこの石仏を運んできて、ここで焙烙を売りつくした後、石仏を海辺のあし原に捨てて帰った。地元の人がこの石仏を発見し、安置しようとしたが、動かないので怪しんでその下を掘ってみると、土中にこの仏の台座と思われる角石が深く埋もれていたため、皆が不思議なことだと思い、その台石を掘り出し、この石仏を置いたのが、すなわちこの地蔵である。(ほうろく：素焼きの平たい土鍋)

⑦ 熱田神宮(あつたじんぐう)

三種の神器の一つ草薙神剣(くさなぎのつるぎ)を祀ったのが神宮の起源で、社が鎮座されたのは景行天皇の末年頃(2世紀始め)とされる。熱田神宮は、昔の海に向かって建てられており、この南門が正門となる。古くから「熱田さん」「宮」とも呼ばれ、6月5日の熱田まつり(尚武祭・しょうぶさい)で親しまれている。19万㎡に及ぶ境内地には、本宮、拝殿、神楽殿などのほか、摂社8、末社19が鎮座する。また、歴史的建造物として、清雪門(せいせつもん)、西楽所(にしがくしょ)、龍影閣(りょうえいかく)、信長塀(のぶながべい)、佐久間灯籠(さくまとうろう)、二十五丁橋(にじゅうごちょうばし)などがある。

⑧ 断夫山古墳(だんぷさんこふん)

全長151mで、東海地方最大の前方後円墳である。6世紀初頭に築造され、古来、「日本武尊」の妃「宮簀媛(ミヤツヒメ)」の墓と伝えられていたが、現在では天孫を祖とするといわれている豪族「尾張氏」の墓と考えられている。永らく熱田神宮の所属地として管理されていたが、戦後、名古屋市の戦災復興事業として仮換地され、昭和55年に愛知県の所有となった。昭和62年7月9日、国の史跡に指定された。